

招待席

富永 太郎

とみなが たろう 詩人 1901 - 1925 東京に生まれる。
「山繭」創刊に参加しフランス象徴詩風の散文詩で小林秀雄、中原中也に影響を与えたが夭折、没後昭和二年(1927)家蔵版『富永太郎詩集』が刊行された。大正十三年(1924)七月から十一月までの京都滞在は、中原や小林との深い交渉で満たされ、掲載の優れた散文詩はそこで生まれた。

秋の悲歎

私は透明な秋の薄暮の中に墜ちる。戦慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貪婪な樹々さへも闇を招いてはゐない。

私はたゞ微かに煙を挙げる私のパイプによつてのみ生きる。あの、ほつそりとした白陶土製のかの女の頸に、私は千の静かな接吻をも惜しみはしない。今はあの銅(あかゞね)色の空を蓋ふ公孫樹の葉の、光沢のない非道な存在をも赦さう。オールドローズのおかつばさんは埃も立てずに土塀に沿つて行くのだが、もうそんな後姿も要りはしない。風よ、街上に光るあの白痰を掻き乱してくれるな。

私は炊煙の立ち騰る都会を夢みはしない 土瀝青(チヤン)色の疲れた空に炊煙の立ち騰る都会などを。今年はみんな松茸を食つたかしら、私は知らない。多分柿ぐらゐは食へたのだらうか、それも知らない。黒猫と共に坐る残虐が常に私の習ひであつた……

夕暮、私は立ち去つたかの女の残像と友である。天の方に立ち騰るかの女の胸の襞(ひだ)を、夢のやうに萎れたかの女の肩の襞を私は昔のやうにいとほしむ。だが、かの女の髪の中に挿し入つた私の指は、昔私の心の支へであつた、あの全能の暗黒の粘状体に触れることがない。私たちは煙になつて

しまつたのだろうか？ 私はあまりに硬い、あまりに透明な
秋の空気を憎まうか？

繁みの中に坐らう。枝々の鋭角の黒みから生れ出る、かの
「虚無」の性相(フィジオグノミー)をさへ点検しないで済む
怖ろしい怠惰が、今私には許されてある。今は降り行くべき
時だ 金属や蜘蛛の巣や瞳孔の栄える、あらゆる悲惨の市
(いち)にまで。私には舵は要らない。街燈に薄光るあの枯芝
生の斜面に身を委せよう。それといつも変らぬ角度を保つ、
錫箔のやうな池の水面を愛しよう……私は私自身を救助しよ
う。